

第12回薬害根絶フォーラム

報告者 森戸 克則

日時：2010年10月16日（土）13：30～17：30

会場：北海道大学学術交流会館 講堂

主催：全国薬害被害者団体連絡協議会（通称：薬被連）

共催：（社）北海道薬剤師協会／北海道病院薬剤師会／北海道薬科大学

後援：（社）日本薬剤師会／（社）日本病院薬剤師会／日本社会薬学会北海道支部

薬害オンブズパーソン会議／薬害オンブズパーソン・タイアップ北海道

国民医療研究所／（財）北海道難病連

協賛：（独）医薬品医療機器総合機構

参加者：280名

【はじめに】

12回目で初めての札幌開催となる「薬害根絶フォーラム」、今回のテーマは以下のとおり。

薬害被害の教訓は生かされているか？

—今、北の大地から薬害を問う—

【概要】

<第1部> 実態報告

薬害被害者（9薬害）からの実態報告がありました（各団体8分間）。

- ・サリドマイド 千田氏
- ・HIV 後藤氏（東京原告団）
- ・ヤコブ M. H.
- ・スモン 草場氏
- ・MMR 上野氏
- ・筋短縮症 小田氏
- ・陣痛促進剤 出元氏
- ・肝炎 東京原告24番

続いて今回の「特集」イレッサについて近澤氏から20分間にわたり被害報告が行われました。

<第2部> 徹底討論「薬害被害の教訓は生かされているか？」

以下の「5名」による討論のち、参加者からの質疑応答を行い、最後にまとめを行った。

○サリドマイド：佐藤氏

科学的データに基づいた情報は残念ながら行政サイドから出てこない。最近（2008年10月）、サリドマイドは安全管理の徹底を条件に骨髄腫治療として使用が認められたが（再認可）、国内では過去のサリドマイド薬害被害から管理が徹底されているものの、他の疾患において適応外事例で海外から個人輸入されている現状もあり、新たな被害の発生が懸念される。サリドマイドがもつ危険性（催奇形性）について医療者だけではなく広く国民全体に知ってもらうことが大切と訴えた。

○スモン：中西氏

1979年に薬事2法が改正されたものの生かされていないのは痛恨の極みであり、国が回収命令を出すことが可能にも関わらず、これまでに1度も回収命令を出していない事実をもってしても

過去の薬害被害が生かされていない。行政において「薬害スモン」という文言が使われるまでに31年も掛かっていることも極めて遺憾、患者の立場ではなく製薬会社側に立ったとも言わざるを得ない。教育は重要で子供たちに将来、薬害の被害者にも加害者にもなって欲しくない思いから文部科学省交渉の重要性を訴えた。

○肝炎：武田氏

提訴された方の殆どの方はフィブリノーゲン製剤を投与された事実を知らせていない。情報公開が極めて重要。なお、行政側から「薬害」という言葉が最初に使われたのは肝炎訴訟が初。

○陣痛促進剤：勝村氏

そもそも行政は患者に情報を与えていない。これまでにあった薬害を教育現場で学生に教えていない。その後、医療者になってから薬害で被害を受けた患者のことを知らないが故に薬害が繰り返しておきる土壤があるのでは。高等教育、特に医学教育の中での実際に被害に遭われた方々から生の話を聞くことは重要ではないか。総じて教育は重要で子供たちに伝えていくことが肝要、文部科学省交渉の重要性を訴えた。

○HIV：花井（司会）

「薬害」という文言、厚生労働省はこれまでなかなか使いたがらなかった。最初の文部科学省との交渉時「薬物乱用」の会と誤認して失態をかった文部科学省であったが、毎年交渉を積み重ねていき厚生労働省よりも先に「薬害」という文言を使い出した。

【質疑応答】

フロアから、薬被連のこれまで活動を評価する意見が多かったものの、これまでの約10年間の活動をとおしての具体的評価について質問があり、勝村氏から教育、特に教科書への掲載をとったことが大きい。具体的には文部科学省との交渉において初等教育において学習指導要領解説書に「薬害」が掲載されたこと。加えて医学教育モデルコアカリキュラムの改訂に関しての検討会の場で薬害被害者から直接意見が言えることになったこと。更には文部科学省の協力を得て医学教育の場で薬害被害者が学生の前で講義することなどが成果として上げられる。厚生労働省関係では、レセプト並みの診療報酬明細書が無料で発行されることになった点が成果として上げられる。治療に使われた薬剤の明細を全部見せることで、患者は病院で使われた血液製剤や薬剤の具体的な名前を知ることができるようになったことだけではなく、医療費の内訳も分かるようになったことが大きい。

最後のまとめとして司会の花井から、この10年間で、行政・医療・製薬メーカーいわゆる専門家の間の中で「薬害」という言葉が認知されてきたものの、教訓として薬害から学ぶといことはこれからの課題であるのではないかと発言した。ともあれ、その前提となる情報公開は「薬害」でだけではなく各分野で今後しっかり進めていかなければならないと締めくくった。

【終わりに】

初開催となる札幌、当初は参加者が少ないのではとも懸念されていたものの、過去12回開催されたフォーラムで2番目に多い280名もの参加者を得て盛会であったともいえる。約3万6千枚のチラシ配布や会場手配等の準備を地元ヤコブ病サポートネットワーク北海道の浅川氏および地元の薬害エイズ被害者の井上氏、お2人の尽力に感謝申し上げたい。